

を見るばかりだった。現地人の話では長い戦争のため、ソ連全体が食糧が不足していると言っていた。

広漠千里とはこのことか、どこまでも続くモンゴルの砂漠、夏でも夜になると冷え冷えとする。それが冬ともなれば、零下五〇度ぐらいまで下がる。朝の作業出発の午前七時半になって、零下三五度以下の場合気温が上がるまでは待機させられる。三四度ぐらいになって現場へトラック出発となる。兵隊は身を寄せ合って凍土を走るトラックにゆられていた。

翌二年目の労務は木工場であった。工場や個人家庭で使う木製の道具や家具などを製作する。机、椅子、戸棚から寝台なども作っていた。日本では家具などにニスを塗っていたが、ここではそんなものは無かった。白木地のまま仕上がりだった。二年目になっても相変わらず食糧不足だった。来る日来る日も雑穀粥と塩汁で空腹を抱えての労役だった。

昭和二十二年十一月の中旬、モンゴル大陸に冬が訪れ、大地が凍り出したころ、突然貨車に詰め込まれてナホトカに運ばれた。各地の収容所で労役についてい

た日本の兵隊たちが続々と集まってきた。この海の向こうが日本だと思うと一日も早く帰りたい。わいわい言っていたが、迎える船はまだ来ていなかった。薪運びや民主教育などに一週間ほど経たある日、引揚船が港に入ってきた。揚げられた大きな日の丸の旗を見ると胸が熱くなり、涙がこぼれた。

昭和二十二年十一月二十二日、舞鶴港へ無事上陸することができた。

悲惨を極めたモンゴル抑留

広島県 塩谷 静夫

私は、弘一五六三部隊に入隊し、昭和二十年六月六日、北支（河南省）開封を出発、二十年七月三日満州国龍江省洮南^{ちゅうなん}に着き、主力はソ満国境のハイラルに配備されていました。

八月九日午前三時、ソ連軍が日ソ不可侵条約を一方的に破り侵入して来た。私は牡丹江に出張していて、

戦闘には加わっていないが、突如の事であり、後日知ったことだが、交戦が激烈、アツという短時間であるにもかかわらず中隊長、小隊長をはじめ、相当数の戦友も帰らぬ客となった。「出張者は直ちに原隊に復帰すべし」の命により公主嶺で主力と会し終戦に至る。

十一月三十日、黒河からアムール川を渡河し、ブラゴエシチェンスクで酷寒の一夜を過ごし、十二月一日、貨車で出発、十二月二十五日午後三時ごろ、引込線の雪の広野の街に着いた。この列車の中で水筒の水が凍りついた思い出がある。着いて列車から降りると、今まで見慣れていた警戒兵のソ連兵とはちがう兵士が監視を始めた。後で知ったがモンゴル兵で、この街は、モンゴルのアルタブランク、ソ連との国境の街でした。そして私たちの苦闘のページはここから始まりました。そしてこの日は、雪の夜行軍、峠道を登り、下り始めたころは皆疲れ果て、ヤボンスキー早く早く「ボシヨ、ボシヨ」と銃剣でこずかれながら追い立てられ、おまけに闇夜で、地の底に吸い込まれるようでした。翌日八時ごろ、とある地に着きました。この時既に、

数名の兵が雪の中に倒れ息を引き取りました。私も行軍中疲れ果てこのまま眠ったら死んでしまうが…と思いつつもついに倒れこんでしまい…眠つたらしく、突熱銃剣で突つかれ、眠りから覚めました。が、ボシヨ、ボシヨの声でモンゴル兵だと知りました。しばらくして、ようやく起きて、最後に集結地に到着した一人でした。

そして次の日、軍用自動車に荷物のごとくぎゅうぎゅうに詰め込まれ、ウランバートルに着きました。ここは朔風吹きすさび、砂塵舞い上がる、ゴビ砂漠の一角で、しかも氷点下三〇度〜四〇度の酷寒の地、ここでは三千人ともいわれる死者の出た飢餓と寒さの下での重労働が待っていたのです。体験者でなければ分からない、抑留者の苦闘。分かってもらわなければ死んでも死に切れない、飢えと寒さに加えての重労働、正に生地獄とはこのことかと思わされたことです。その上、ソ連は我々強制抑留者を日本に帰すのか帰さないのか、ウランバートルでは何一つ情報は得られず、家族との音信も一度もできなかった。このような

条件の中で、ノルマに追われ、私たちは何にたとえたらよいのだろうか……。六月中旬ころまで雪が降り、八月下旬からまた雪、氷点下三〇度〜四〇度の酷寒、著もスプーンも要らない小量の朝食をすすり副食はない。小量の昼食のパンを朝食と共に食べてしまつて、昼には食べる物がなく、ただただつらかつた思い出が、みんなの思い出であり、仕事場から往復の途中、煉瓦のかげらがパンに見え、思わず駆け寄つたこともあった。

三〇メートルもある給水塔の上まで、負いで煉瓦を運ばされたが、このおいこには番号が付いていて、ノルマは果たさねばならず、体は綿のように疲れ、死の一步手前、およそ人間として限界を遙かに超えたものでした。

煉瓦作りでは、一日何十回となく、二枚が作れる型枠に、土を水でこねる、それを型に入れるのだが、ひびで両手が噴き出る血で真っ赤になり、痛いこと痛いこと。そんなときでもノルマは増えていったのです。

これが七月、八月のころのことですが、煉瓦用の土取りで、土砂くずれで死んだ者がたくさんあったことも

厳しい事実ですし、また、栄養失調で死ぬ、虱にくわれてチフスで死んだ者、私も四〇度の熱を出したが、冷やす水も飲む水もなかったのです。

外モンゴルでは、川が収容所から遠く、冬季は水面から底まで凍っていました。

賃金も払ってもらつたこともない、どんなに寒い時でも、毛布は私らが持つて入ソしたときの一枚だけ、別の支給は一切ありませんでした。

過酷な労働の上に、更にこのような条件の中で、父母、妻子を偲び何としても生きて帰りたい、帰国への思い一本、一筋で、耐えに耐えた毎日でした。

私は、昭和二十二年の暮れ、七年ぶりで、雪の降る祖国、函館港に上陸したのです。生きて帰つたのです。

このような、どのような表現、言語をもってしても説明もできない事実です。日ソ友好条約を破り、ポツダム宣言の「軍隊を解散して、家に帰り生産に従事すべし」の条約を破つて強制拉致したことです。

私は昭和二十二年の暮れに、七年ぶりに懐かしい祖国、雪の降る函館港に上陸、復員しました。このよう

な、悲しいシベリア抑留は、日ソ友好条約を一方的に破り、六〇万人余の我々を含む在満日本人を、言語に絶する苦境に陥れたソ連の行為である。絶対に忘れることのできない、許すことはできない……こんな思いです。

モンゴルでは共產教育はなかった。しかし帰国した私を含む多くの者は、就職では、筋金入りと思われる泣いたこともあります。

戦争に泣いた母よ安らかに

私は昭和二十二年十一月、モンゴルのウランバートルから七年ぶりにやっと自分の家に帰って来た。

母は「お前生きていたのか、よう帰ったのう」と言った。そして「兄を見なかったか」と言った。私は母の言葉で当時四十二歳の兄も召集され、シベリアに抑留されたことを知ったのである。

私は応召するまで呉海軍工廠に勤めていた。母は私の朝食と弁当を朝三時半に起きて作ってくれた。私は応召の朝、「お母さん、明日から早く起きなくてもよいですね。長生きをしてください」と言った。この一

言が当時二十二歳の末っ子の私の小さな、母への孝行ではなかったろうか。

母は私が帰って三日目に意識不明となり、私と話す間もなく兄の帰国を待たず、間もなく帰らぬ人となった。寒い朝だった。お母さん、おやすみなさい。お母さん、私はお母さんより十年長生きをしています。

ソ連製の小さなシューパー(外套)

東京都 植原 秀一

昭和十八年の冬、満州国興安南省西科前仁義一佛立開拓団吾妻部落に家族四人で入植した私は、昭和二十年の夏、三十八歳で現地召集となり、ノンジャン(嫩江)の有村隊に入隊した。

しかし、すぐにソ連軍の捕虜となり、シベリアで厳しい冬を二回も過ごす抑留生活を送り、昭和二十二年の春、「明優丸」で舞鶴へ帰還した。

ソ連製の小さいサイズのシューパーは、全てのもの